

泉穂の気まぐれ恋愛講座

——丸岡泉穂



「オレ、処女としかつき合わへん」とおじさんは言った。京都のあるおでん屋さんで、仕事の打ち合わせを兼ねてお食事していた時のことだ。私はこんにやくが喉につかえたね。18歳の青年ではない。40歳くらいのお方が、そう言ったのだ。ま、確かに年齢おじさんでも見た目は若い。遊び上手な若目

那という感じで、独身である。「それはやっぱり、テクニクを比較されるのがイヤだからかしらん？」という言葉を、こんにやくと一緒に必死に呑みこんで、ただ、「どうしてですか？」と尋ねた。「やっぱり、女を自分の色に染めたいやん」その人はそう言って、私に流し目をした。私「私は処女じゃありません」とばかりに、彼の流し目を冷たく無視した私。「女を自分の色に染める」という発想が、死ぬほど嫌いなのだ。何色にも染まっていけない人を自分の思い通りに仕立てあげていく作業は、たしかにやりがいがあるって楽しいかもしれない。だって、自分の望んだ通りになるんだもの。でも、さっきのうのを「恋愛だ」と言われると、「ちよっと待ってよ、おれさん」の気分になる。お互いこれまで生きてきた人生をぶつけ合って、「どうしてこ

んなに違うのよ」と悩みなながら、いつの間にか二人の価値観や考えが融合して、「お互い」が新しい自分になっていく。それが恋愛ってモンじゃないわけ？このおじさんの場合、結局、恋愛をしてもちよっとも考えも価値観も変わってないわけでしょう？女の口の方はかりが急激に教育されるだけで。確かにその人は、とっても幼稚だったと思う。「処女としかつき合わない」という、大人の女性を拒否している発言からも伺えるように、ずっと少年のままなのだ。「いや、男はいくつになっても少年のままでいたいものだよ」と彼は言った。そっだからか。私は男も女も年齢を重ねただけの落ち着きや深みというものを持って欲しいと思う。それだとおえ髪の毛をブルーに染めていようとも、見た目が遊び上手な若旦那だったとしても、一言声を聞き数分喋っただけで感じ

られる重みというか「素敵に年を重ねているな」と思わせる何か欲しいのだ。そしてその中に、どこもなく少年っぽさが残っていたり、無邪気な少女のような魅力が感じられたら、それはすごいと思うのだ。でも、彼の場合、少年そのものだった。嬉しそうに自慢する恋愛遍歴のどこを聞いても一緒。彼女が一人の人間としてどれだけ魅力があるかってことを、ちよっとも考えていないみだりだった。お人形のように可愛がって、着せ換えをして、彼女が何かを言おうものなら、「キミは僕のことに従えないのか？」といった理不尽な叱り方をする。それで40歳になってしまった彼。一つや二つの恋をした人なら、ただ素直に相手の言うことを聞いただけじゃおさまらずに、あれこれ事も起こるだろう。だけどそういう中から色んなことを知ったり、男と女の違いに驚いたり、そしてお互いを尊重し

合うようになる。そんな恋愛の本当の醍醐味を知らずにきてしまった彼。結局、そんなもんだから、気づいていないのだ。彼が女の口を選んでいるつもりでも、彼こそ恋の初心者である「女の口」たちからしか選ばれていないのだという事実を。おでん屋の隣の席で、彼の話を耳にして優雅に微笑んでいた魅力的なレディがいた。「つまらない話を聞かされて大変ね」とウインクしてくれた彼女。そうだ、こういう女性から、この男は絶対に選ばれることはないのだ、と私は思ったのだ。プロフィール 1965年生まれ。同志社女子大学卒、英霊遺囑ロックス勤務を経て現在コピーライター。公告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「あふれた無邪気な娘になる」(PHP研究所)、キヌまで待てない(大和書房)など。